

2017 がんばろおおさかフェスタ開催！

～力を寄せ合い 歌って踊って元気にスタート！～

2月5日

□2月5日(日)13:30～16:00 守口文化センターエナジーホールで、毎年恒例の「がんばろおおさかフェスタ」(大阪うたごえ協議会主催)が開催され、2017年最初のうたごえ仲間が集まり、楽しいうたごえを交歓しました。

□新年恒例のめでたい”獅子舞“のオープニング！最初に大阪うたごえ協議会・岡邑会長から「今年は政治の上でも”平和“の問題が危うい厳しい年になる。平和のうたごえをますますひろめていきましょう！70周年のうたごえの催しの企画にご協力を！今日は「日本のうたごえ祭典 in えひめ」で金賞受賞の「コール大東」「レガータ」の合唱も披露されます。上手な合唱に学んでください！」と新年の挨拶がありました。

□トップバッターの「女性のうたごえ(合同)」さすがに大阪の女性の合唱団のレベルは高い！
「黄金の花」と「私が私であるために」の2曲。
 「お金に心を捨てないで」「お金に友を捨てないで」「本当の花を咲かせて・・・」と静かに、力強く訴えかけてくる”母さんの声“が会場に流れました。



□「北西地域合同」のうたごえ：自分たちの歌を大事にし、元気に歌っている姿に感動！
「美らうみ」：「沖縄の美しい海と美しい空」「さとうきび畑にしみこむ父の涙、父の残した命を生きる」と沖縄讃歌。**「私を褒めてください」**：分かり易くて親しみやすいメロディと歌詞。出色の曲。「日本は72年戦争を一度も起こしてはいません。戦争で人をひとりも殺していません。褒めてください。生まれて72年私は役に立つ。100年たっても地球規模で役に立ちます。日本の憲法が役に立つ。この憲法を守ってください。」とそのままの歌詞で歌っていて素晴らしい歌になっている！・・・



□「南部地域合同」では、「人間のうた」を歌いました。合唱団昂のメンバーも舞台に立ち、男声パートを担当し、会場に”人間の尊厳”を響かせました。

□今年の**ゲスト**は、石若雅弥氏が率いる、20代の若き8名の**弦楽器奏団「STRINGS」**。



DRAFT」の演奏：「情熱大陸」「ダースペーターのテーマ」「名探偵コナンのテーマ」「365日の紙飛行機」の4曲。軽快に明るく元気な弦楽器演奏で会場は一気に若者のはなやかで明るい熱気に包まれました。大拍手！

□「北部地域合同」「北河内地域合同」と続き、「青年と保育のうたごえ」では「楽しいことをいっぱい」を歌と踊りで元気いっぱい、“若さ”とは“いいなあ！”と感じ入る舞台。「HEIWAの鐘」もよく響いて素敵な合唱！彼女たちの得意な曲として板についてきた感じ！「ららら」が活動の中心とのこと。今年もがんばってください。

□「2016日本のうたごえ祭典 in えひめ」の「合唱発表会」＜一般の部 A＞金賞受賞の「コール大東」、＜女性の部＞金賞受賞の「レガーテ」が得意の曲を聴かせました。

「コール大東」：男声4名、女声12名の混声合唱。

「ラ・レボリューション」はよく揃った合唱、特に男声の美しい声がよく響いていて、しかもよく溶けこんで聴こえる。見事な発声！

「スワニー」は一転、帽子と杖で歌と踊り！舞台を見ていて楽しく元気になる曲。金賞受賞を納得！



「レガーテ」：うたごえ祭典で20年以上金賞を受賞している日本を代表する女声合唱団。今回は「きらりと

と光るダイヤモンドのような日」と「ダンシング・クイーン」特に「きらりと光るダイヤモンドのような日」はメロディーも和音もむつかしい、聴いていても大変な難曲！よくここまで合わせるなあと感嘆！日頃の練習の努力に裏打ちされた曲であることがよく理解できました！



□最後に「大地讃頌を歌う合唱団」が「大地讃頌」を歌い上げました。

□閉会に当たって今年1年の大阪のうたごえの健闘を誓っての奥村副会長の挨拶とともに、200名近くの参加者に「お楽しみ抽選」の景品が当たる発表に会場は湧きました。

「歌うところ」

「人びとが相集って(あいつどって)歌うのは、すばらしいことだと思う。性差や年齢の違いを越えて、ともに歌うのは、すばらしいことだと思う。

人間の生き方は、ひとによって、それぞれさまざま。だが、合唱(コーラス)の美しい響きをつくりだすには、他人(ひと)の歌を聴かねばならない。

そして、他人(ひと)はまた自分の声に耳を傾けているのだということを知らねばならない。うまく歌うのもだいじだけれど、合唱(コーラス)でなによりもだいじなのは、互いを信頼し、敬うこと。他人(ひと)の声を好きになること。

そして、人間(ひと)はそれぞれの顔かたちと同じように、めいめい違った声をもっているのだということに、驚きと歓び(よろこび)が感じられたら、あなたの合唱(コーラス)は、きっと、これまでより多くのひとの心を打つだろう。」

福岡フロイデコール第十回演奏会・パンフレット

「混声合唱のための『うた』(武満徹・詞/曲、谷川俊太郎・詞)他を演奏

1994年11月27日 メルパルクホール福岡

武満徹『時間の園丁』(新潮社)刊より



先日、我家に初めてお雛さんがきました。

17.1.31 BR/山本 力

トルストイ「戦争と平和」と与謝野晶子「君死にたまふことなかれ」

「トルストイは「戦争と平和」において、「進軍ラッパ」が鳴りひびいた途端に、今までロシア人の「捕虜」に人間として接してきた「ナポレオン軍」の将校・兵士が、突如として、「人間性」を失い、獣性に豹変する情景を鋭く描き、「最下等」の動物的激情に支配されて、「けだもの」と化した人間が平然と「人殺し」をするのを「戦争」だと考えるがゆえに、”戦争と平和“執筆後四十年、トルストイは「日露戦争」勃発の報に接するや、七十六歳に達したにもかかわらず直ちに「ロンドンタイムス」に投稿して(一九〇四年六月二十七日)、全世界に向けて「戦争反対」を訴えたばかりではなく、”悔い改めよ“という長文の反戦論を執筆。「人間性」を喪失して「獣性」に赴き、「人間」が「人間」を殺す戦争の絶対阻止を叫んだ。

与謝野晶子は、このトルストイの「反戦の訴え」「魂の叫び」を知り、日本人民としてトルストイに呼応するのが責務であると考え、直ちに”君死にたまふことなかれ“という絶唱を『明星』誌上に発表した。(一九〇四年九月号)

ところが与謝野晶子の音吐朗々たる「反戦の訴え」に対し、明治文壇の重鎮「大

町桂月」が二度にわたり『太陽』誌上において激しく攻撃をして（一九〇四年十一月号・一九〇五年一月号）晶子を「乱臣也、賊子也、国家の刑罰を加ふべき罪人也」と論難した。だが、晶子は一歩も退かず、「ひらきぶみ」と題する「公開状」を『明星』に発表（一九〇四年十一月号）「歌はまことの心をまことの声に出してつくるもの」なり、「当節のやうに死ねよ死ねよと申し候（そうろう）こと、またなにごとにも忠君愛国などの文字や畏れおほき教育御勅語などを引きて論ずることの流行は、この方却って（かえって）危険と申すものに候はずや」と断じ、平然と応酬した。」

莊子邦雄著『人間と戦争』朝日新聞出版（2013年4月）より

「降りつむ」 永瀬清子 明治三十九年(一九〇六年)二月十七日生

平成 七年(一九九五年)二月十七日没

「降りつむ」は清子の第四詩集「美しい国」に入れられた詩である。

一九四五年(昭和二〇)の夏に敗戦を知らされた清子は空しさとともに安堵と解放感を味わった。が、空襲で廃墟となった町で人々は飢え、戦場で生き延びて帰国しても職のない復員兵の犯罪が相次いで報道された。一〇月末には、岡山市にも占領軍約五〇〇〇人が進駐して、焼け残った市街や後樂園を我が物顔に闊歩する占領軍兵士の姿が見られるようになる。窮乏から逃れる手だてを持たぬ女たちが派手な服装で彼らを相手の街娼となって夜の町に現れた。が、何よりも心を疼(うず)かせたのは、六月の岡山空襲で家族を失った戦災孤児たちだった。駅舎の片隅や地下道を住み処(か)にした。通行人に食べ物を乞い、店の物をかっぱらって追われながら生き延びた。空襲の猛火から着の身着のままで逃げてきたこの子らは冬になると凍えた。四人の子持ちの清子の胸は疼くが、彼女自身、この子らに手をさしのべる余裕がない。初めて経験した敗戦国のもっとも酷薄な現実だった。

屈辱の日々を過ごす大人たちの心情が彼らの姿に重なった。

金沢育ちの清子にとって、雪はなつかしくやさしい。“かなしみを糧として生きよと雪が降りつむ”“哭きさけびの心を鎮めよと雪が降りつむ”のである。

戦中の言論統制から自由になった今こそ、詩人として人々の心を癒したいと清子は思う。

補筆：昭和二年(一九二七)秋結婚して、夫の勤務地である大阪の大阪市東成区森小路一一四番地(現旭区大宮三丁目十五番地)に新居を構えた。昭和六年(一九三一)

四月に夫の転勤で東京都杉並区高円寺に転居している。

後年夫の実家岡山県に居を移した。

参考：井久保伊登子著『女性史の中の永瀬清子』戦後編 ドメス出版(2009年1月刊)

藤原菜穂子著『永瀬清子とともに』黒潮社(2011年6月刊) より

(注)「歌うところ」「トルストイ「戦争と平和」と与謝野晶子「君死にたまふことなかれ」「降りつむ 永瀬清子」は若園さんから投稿いただきました。ありがとうございました。(ニュース編集子)